

The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No.23 2019

「総合的な学習の時間の指導法」における異文化教材の扱い
－関連研究の整理－

川 島 浩 勝

Cross-Cultural Materials for Teaching Integrated Studies Classes
Reviewing Relevant Research

KAWASHIMA Hirokatsu

長崎外大論叢

第23号
(別冊)

長崎外国語大学
2019年12月

「総合的な学習の時間の指導法」における異文化教材の扱い —関連研究の整理—

川 島 浩 勝

Cross-Cultural Materials for Teaching Integrated Studies Classes Reviewing Relevant Research

KAWASHIMA Hirokatsu

Abstract

The course of teacher training at NUFS has been making preparations for the teaching of integrated studies classes using cross-cultural materials. Several relevant studies were reviewed, and useful information and knowledge for such teaching was obtained. It was found that teaching integrated studies classes using cross-cultural materials might involve some difficult elements, but that if the value system of different cultures is properly implemented in the materials, these classes can become highly informative for students.

キーワード

総合的な学習の時間、異文化教材、価値観

1. 研究動機

学校法人長崎学院（長崎外国語大学）は教員免許状（外国語、英語）の所要資格を得させるための教職課程を有する大学であるが、教育職員免許法施行規則の変更（平成29年11月）に伴い、平成31年2月に文部科学省より「再課程認定」を受けた。「再課程認定」の要件の一つとして「総合的な学習の時間の指導法」の新設が挙げられるが、その科目の全体的目標は次のようになっている（文部科学省2017, p. 8）。

第1 目標

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することかできるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

この「総合的な学習の時間」は、2017（平成29）年度3月に告示された小学校学習指導要領・中学校学習指導要領における「総合的な学習の時間」および2018（平成30）年度3月に告示された高等学校学習指導要領における「総合的な探求の時間」に対応したもので、教職課程の中に「総合的な学習の時間の指導法」を新設することにより、「総合的な学習の時間」・「総合的な探求の時間」の指導を充実させる意図があるものと解釈できよう。

上述の全体的目標を見てもわかるように「総合的な学習の時間」の指導内容の幅は広く、多種多様な指導テーマの設定が可能であるが、一般的なガイドラインとして次のようなことが明記されている（文部科学省 2017, p. 36, 項目番号: 5）。

- (5) 目標を実現するにふさわしい探究課題については、学校の実態に応じて、例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の将来に関する課題などを踏まえて設定すること。

このガイドラインにおける「国際理解」に着目した時、関連事項として「異文化情報」や「異文化理解」といった用語を挙げることができるが、長崎外国語大学の教職課程において開講する「総合的な学習の時間の指導法」では、指導テーマの一つとして「異文化情報」を扱うことになっている。新設科目ということもあり、現在、「異文化情報」に基づく「総合的な学習の時間の指導法」に関する情報を収集中であるが、本研究ノートでは、現段階における関連諸分野の情報や知見をまとめ、1) 「国際理解」や「異文化情報」にフォーカスを当てた「総合的な学習の時間」の実践の現状、2) 実際の指導における留意点、3) それらを基にした教材の一つの在り方を示す。

2. 「総合的な学習の時間の指導法」の現状

文部科学省のホームページ（「総合的な学習の時間の現状と課題，改善の方向性（検討素案）」）を見ると、次のような記述がある。

総合的な学習の時間の実施状況を見ると、大きな成果を上げている学校がある一方、当初の趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない状況も見られる。また、小学校と中学校とで同様の学習活動を行うなど、学校種間の取組の重複も見られる。こうした状況を改善するため、総合的な学習の時間のねらいを明確化するとともに、児童生徒に育てたい力（身に付けさせたい力）や学習活動の示し方について検討する必要がある。総合的な学習の時間においては、教科の補充・発展学習や学校行事などと混同された実践が行われている例も見られる。そこで、関連する教科内容との関係の整理、中学校の選択教科との関係の整理、特別活動との関係の整理を行う必要がある。

この文章は最近のものでなく、やや古いものだと思われるが、ある意味では「総合的な学習の時間の指導」の難しさを表わしており、筆者が現職の教員に聞いた範囲ではこのような状況はいまでも続いているようである。このような問題に対して、同ページでは次のような「指導的提案」（「ねらいや育てたい力の明確化」）がなされている。

ねらいの明確化

総合的な学習の時間のねらいについては、小学校・中学校・高等学校の一貫性を確保するため、小学校・中学校・高等学校共通とすることとしてはどうか。また、総合的な学習の時間のねらいを明確にするため、日常生活における課題を発見し解決しようとするなど、実社会や実生活とのかかわりを重視することとしてはどうか。

育てたい力の明確化

学校間・学校種間の取組の実態に差がある状況を改善するため、総合的な学習の時間において育てたい力の視点を例示することとしてはどうか。その際、例示する視点は、学習方法に関すること、自分自身に関すること、他者や社会とのかかわりに関することなどとしてはどうか。そのうえで、具体的な育てたい力は、各学校で設定することとしてはどうか。

「国際理解」や「異文化情報」のコンテキストで考えると、この2つの「指導的提案」における「実社会や実生活とのかかわり」や「自分自身に関すること、他者や社会とのかかわりに関すること」に着目した授業実践は難しいことなのかもしれない。一般社団法人英語4技能・探究学習推進協会のホームページ（「高校の「総合的な探求の時間」とはどのような授業なのか？」）を見ると、小学校・中学校における「総合的な学習の時間」で扱われる具体的学習内容に違いがあることがわかる。顕著な違いは次のようになっている。

- 1) 小学校では「環境」「地域の人々の暮らし」「伝統と文化」が、また、中学校では「キャリア」「伝統と文化」「福祉・健康」が学習テーマとして扱われることが多い。
- 2) 「国際理解」や「情報」は、小学校では7割程度の頻度（それぞれの指標は65.8と67.6）で学習テーマとして扱われるが、中学校ではその頻度が半分程度（それぞれの指標は33.1と37.2）になる。

この調査における基礎的情報が明記されておらず、断定的なことは言えないが、特に、2)における「国際理解」の傾向は注目に値するであろう。上述の文部科学省のホームページでは「学校種間の取組の重複の状況を改善するため、児童生徒の発達段階を考慮し、各学校における実践を踏まえ、小学校・中学校・高等学校の各学校段階ごとに学習活動の例示を見直すこととしてはどうか」と述べられているが、このような調査結果はどのように解釈できるのであろうか。一つの解釈は、1) 小学校では「外国語活動」があり、それと関連させて「総合的な学習の時間」の中で「国際理解教育」が行われるが、2) 中学校では「国際理解教育」の要素を含む正規の英語の授業そのものがあるので「総合的な学習の時間」では他のテーマが選ばれる、ということである。また、小学校での「総合的な学習の時間」で行われる「国際理解教育」は相対的に実施しやすいが、生徒の発達段階を考えると、相対的に高度さが求められる中学校での「総合的な学習の時間」では「国際理解教育」を行うことは難しくなる、というような解釈も成り立つであろう。

現時点では、どちらの解釈が正しいかわからないが、大分県教育委員会のホームページの情報（「待

ったなし！次年度から！いえいえ今から！！ 総合的な学習の時間の充実に向けて」等を見る限り、中学校での「総合的な学習の時間」で「国際理解」のテーマを取り上げることは難しいようである。確かに、中学校での研究課題例として、「地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観（国際理解）」(p. 6)として挙げられているが、研究計画のモデルとしては、1)「地域の自然環境や環境問題とその保全に取り組む人々や組織」(第1学年)、2)「地域の食やそれに関わる地域の産業及び生産者」(第2学年)、3)「町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織」(第3学年)、の3つの研究課題(p. 5)が大きく取り扱われている現状がある。推測の域は出ないが、モデル的課題として「地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観（国際理解）」を体系的に紹介できるようになるためには、課題遂行のためのノウハウをさらに蓄積しなければならないのかもしれない。何れにしても、大規模な調査を行い、「総合的な学習の時間」における「国際理解」や「異文化情報」の扱われ方を研究する必要がある。

3. 「異文化情報」に基づく「総合的な学習の時間の指導法」の最終目標

「異文化情報」と一口に言っても、その範囲は極めて広い。例えば、埼玉県羽生市立羽生北小学校では、小学校6年生の「総合的な学習の時間」で「世界の12才は今」というテーマで国際理解教育を行っている(埼玉県教育員会のホームページより)。世界の同世代の子供達の様子を調べ、同時に「自分の生き方を見つめ直す学習」を行っているが、授業の感想として「国や地域によって学校の様子も様々で、学習する教科や時間、休み時間の過ごし方、学校にある施設や人気のスポーツやゲーム、放課後の過ごし方などを知ることができた」等と述べられているが、日本の文化との違いを認識しながら、対象となる様々の異文化情報が小学生にもたらされたものと思われる。

佐野他(1995, p. 69)は、文化理解には下記の3つのレベルの教育が必要であると述べている。

- (1) 必要な文化的情報を与える教育
- (2) 異なる価値観を理解する柔軟な態度の育成
- (3) 実質的な体験を通してのコミュニケーションの技能

この3つのレベルの内(1)と(2)で考えた場合、上述の小学校での「総合的な学習の時間」は文化的情報の提供という意味では成功していると思われるが、「異なる価値観を理解する柔軟な態度の育成」という意味においては「まだまだで、これからの課題」ということになるであろう。確かに、小学校の段階でそのような態度の完全育成は難しいと思われるが、「総合的な学習の時間」の開設の趣旨を考え「異文化情報」に基づいた授業を行うのであれば、最終的には「異文化における様々な価値観を理解する柔軟な態度の育成」を最終目標としてシラバスを組み立てる必要があると思われる。

林(2000, pp. 43-44)は、国際理解・異文化理解学習におけるテーマに関して次のような見解を述べている。

「事物の理解から『人の心』を核とした理解へ」をめざしたことばとしての学習が、実は英語学習の本質である、ということに中学段階でいかに気づかせることができるかが教師の指導の醍醐味である。「総合的な学習の時間」との関わりの中で、さらには他教科との関連の中で生きた言語として

英語の授業を生徒とともに「SHARE」していきたいと考えている。

同様に、黒羽（2000, pp. 77-78）も、国際理解教育に関して次のような見解を述べている。

その場限りの思いつきの指導では、国際理解の学習は極めて「事物の理解」にとどまってしまうがちである。その過程に「人間を介在させる」試みを行うことで、『事物に対する理解から「人のこころ」を核とした理解へ』と生徒の学習が発展して行くと考ええる。

先に述べた「世界の12才は今」は一例にすぎないが、小学校や中学校で行われる多くの「国際理解学習」や「異文化学習」は「事物の理解」のレベルで終わっているのではないだろうか。黒羽は、学習が発展し「異文化における様々な価値観を理解する柔軟な態度の育成」を行うのに相応しいテーマとして、下記のようなものを挙げている。

- (1) 平和を愛する心
- (2) 人権を尊重する心
- (3) 人物理解（自分・相手）
- (4) 日本（人々、文化、習慣、生活信条、社会など）への再認識
- (5) 外国（人々、文化、習慣、生活信条、社会など）への認識・理解
- (6) コミュニケーション能力と表現力
- (7) 外国の人々との交流意欲
- (8) 外国の風俗習慣などに対しての教養と接し方
- (9) 国際的諸問題への関心や解決への参加意識
- (10) 「違い」を発信・受容し「SHARE」する心

池田（2019）は混迷する日本の英語教育の在り方を論じ、1）現実生活の中に生きている生徒の心にどれほど届く教材であるかどうか、2）生徒が自分の生き方と関連づけられるような授業かどうか（p. 140）、といったことが最終的に最も重要になってくると述べているが、「人の心」や「生き方」という点では「異文化における様々な価値観を理解する柔軟な態度の育成」と重なる部分が多々ある。「事物の理解」を超えところで、生徒を新たな価値観に触れさせることができれば「総合的な学習の時間」は意義深いものになるであろう。

「事物の理解」と「価値観」に関して、佐野他（1995, p. 73）は次のような見解を述べている。

品物や行動に関する文化情報の不足以上に、考え方や感じ方の違いが異文化間の相互理解を難しくします。目に見える差は、誤解の理由もすぐ分かり対応しやすいのですが、価値観の差はとらえにくいだけに誤解が積み重なり、人種的な偏見へと繋がるからです。

「異文化における様々な価値観を理解する柔軟な態度の育成」が進めば、誤解を少なくし、人種的な偏見を無くすことに繋がると思われる。「異文化情報」における異文化の価値観に基づいて「総合的な

学習の時間」を实践（少なくとも目標として）することは極めて重要であろう。

4. 「異文化情報」に基づく「総合的な学習の時間の指導法」：異文化の価値観に対する理解を深める教材作成に向けて

遠藤（1994, p. 100）は異文化の価値観を扱う教材や指導に関して、次のような見解を述べている。

英語圏の人々の表面に表れた風俗や生活習慣を知るための教材は、比較的豊富であり、その扱い方も特にむずかしいことはない。これに対して、表面に表れたものの根底にあってそれを規制している考え方や価値観は、それに劣らず重要であるが、学習者に理解させることは必ずしも容易ではない。

ここでは、異文化の価値観に対する理解を深めるような教材として西田（1989, pp. 141-145）を紹介する。西田は、価値観の違いによって引き起こされる日本人とアメリカ人の文化的摩擦の諸相を研究したものである。具体的な会話場面を設定し、一般的な日本人とアメリカ人がもっている価値観をどのように認識しているか、を聞き取り調査で明らかにしているが、下記はその例である。まず、1) 対話文による場面設定、2) 日本人とアメリカ人の価値観の違い、3) 調査のポイント、を見てみよう。

対話文による場面設定は、下記の通りである。

1) 場面

②選抜 — 先輩をさしおいて選ばれる

＜アメリカで＞

真理は日本からの留学生である。大学でテニス部に入部したところ、今日、大学の選手権大会の選手の一人に選ばれた。真理は、部員のジャネットと話をしている。

Mari: I don't understand why I was chosen.

Janet: It's because you're a good player.

Mari: But I'm new here and there are many seniors.

Janet: You play better than they do. Don't worry about the selection.

Mari: But in Japan, the seniors are usually chosen for a tournament. I worry about how they'll feel about my being chosen.

Janet: Mari, I don't really understand why you worry so much about being chosen.

真理：なぜ私が選ばれたのかわからないわ。

ジェネット：それはあなたがすぐれた選手だからよ。

真理：でも、私はここでは新参者だし、たくさん先輩がいるのに。

ジャネット：あなたは彼らよりうまいわよ。選抜について悩むこともないわ。

真理：でも日本では先輩が常にトーナメントに選ばれるの。私が選ばれたことについて先輩達はどう思うか心配だわ。

ジャネット：真理、どうしてあなたが選ばれたことについてそんなに悩むのかわからないわ。

また、日本人とアメリカ人の価値観の違いに関しては、次のような事に言及がなされている。

2) 日本人とアメリカ人の価値観の違い

日本人：

「日本の社会での先輩・後輩の関係は、中学、高校、大学などを経て日本人の意識の中に深く入り込んでくるが、このような意識の形成には部活動が一役買っているようだ。日本の学校における部活動では、後から入った者（下級生）は、掃除や球拾いといった下働きをし、部を背負って立つのは長年所属している上級生といったパターンが一般的である。」

アメリカ人：

「一方アメリカでは、先輩・後輩といった関係は日本のように明確に存在しない。もともとアメリカ人は、年齢や経験の長短、社会的地位によって対人関係を作ることを好まず、できる限り平等の立場でコミュニケーションすることを好む傾向が強い。このため、運動部内でも掃除や球拾いは全員の仕事であり、試合には上級生、下級生に関係なく、能力のあるものが選ばれるというのが一般的のようだ。」

この調査のポイントは、下記の通りである。

3) 調査のポイント

「アメリカにやって来たばかりの日本人留学生が、所属部の参加する大学選手権大会に出場選手に選ばれたことから、多くの先輩をさしおいて自分が選出されたことを非常に気にしている場面」が設定されている。「日本の先輩・後輩のルールとアメリカの能力主義のルールの対立」が調査のポイントである。

調査では、真理とジャネットのそれぞれの言動に対して日本人とアメリカ人がどのように思っているか、が調べられ、例えば、次のような調査結果が報告されている。

アメリカ人が見た真理：

「他人のことを気づかっている」と好意的に回答したものが全体（七四名）の二割を、「典型的な日本人」と中立的回答をした者が半数近くを占めた。「アメリカ人の習慣を知らなすぎる」と批判的回答をしたのは三割弱であった。」

もしあなた（アメリカ人）が真理だったら：

「誇りに思う」といったように、実力主義的ルールに影響されていると思われる回答が六割強を占めた。しかし、「真理と同じ」と答えたものも三割弱あった。」

この調査のユニークな点は、一般的な国民性について言及したものではなく、日本人とアメリカ人とが実際に接触し、会話を交わす中で、文化の違いによって誤解や摩擦が生じると考えられるような

場面に対して、日本人やアメリカ人がどのように感じ、反応しているかを実際のデータをもとに調べ、記述していることである。異文化の価値観に対する理解を深めるには良い教材と言えよう。先述したように、考え方や感じ方の違いが異文化間の相互理解を難しくするが、このような会話を读ませる（日本語でも可能）作業を通して、「異文化における様々な価値観を理解する柔軟な態度の育成」を行うことは十分可能である。実際の「総合的な学習の時間」の授業では、調査結果を聞いて異文化における価値観に対する理解を深めたり、また、グループ討論や身近にいる外国人に同じ質問し、その結果をまとめ、クラスで発表する活動も可能である。「事物の理解」を超えたところでより深みのある「総合的な学習の時間」が実践できるであろう。

5. 最後に

本研究ノートでは、現段階における関連諸分野の情報や知見をもとに、「異文化情報」に基づく「総合的な学習の時間」の実践の難しさについて述べたが、「事物の理解」を超えた深みのある「総合的な学習の時間」の実践の可能性についても言及した。今後は、より詳細な情報を集め、「異文化における様々な価値観を理解する柔軟な態度の育成」の可能性を様々なレベルで研究して行く予定である。

【参考文献】

和書

- 池田真澄(2019).『現場発！人間的な英語の授業を求めて』高文研.
- 遠藤栄一(1994).「異文化理解のための教材論」(第2章「英語教育教材論」・第3節)片山嘉雄・遠藤栄一・佐々木昭・松村幹男(編)『新・英語科教育の研究《改訂版》』大修館書店, pp.98-105.
- 片山嘉雄・遠藤栄一・佐々木昭・松村幹男(編)(1994).『新・英語科教育の研究《改訂版》』大修館書店.
- 黒羽博行(2000).「国際理解を中心とした「総合的な学習の時間の指導」」荒木秀二・後藤英照(編)『小・中・高を結ぶ 英語教育と総合的な学習』三省堂, pp.63-91.
- 佐野正之・水落一朗・鈴木龍一(編)(1995).『異文化理解のストラテジー—50の文化的トピックを視点にして』大修館書店.
- 瀬田幸人(2007).「異文化理解教育で扱うべき文化要素について」岡山大学教育学部研究集録 第134号, pp.129-139.
- 田中茂範(2017).「多文化共生時代の英語教育 多文化共生状況を生きるために求められるもの」(Part 1「多文化共生時代を生きる」・第1章)森本俊・佐藤芳明(編)・田中茂範・阿部一(監)『多文化共生時代の英語教育』いっずな書店, pp.10-18.
- 西田ひろ子(1989).『実例で見る 日米コミュニケーション・ギャップ』大修館書店.
- 林正太(2000).「中学校・高等学校外国語教育の改善—新しい学習指導要領の要点解説と校内研修のあり方をさぐる—」荒木秀二・後藤英照(編)『小・中・高を結ぶ 英語教育と総合的な学習』三省堂, pp.31-45.
- 文部科学省(2017).『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編』
- 若松孝慈(1994).「異文化理解への対応」(第4章「英語教育方法論(1)理論編」・第6節)片山嘉雄・遠藤栄一・佐々木昭・松村幹男(編)『新・英語科教育の研究《改訂版》』大修館書店, pp.188-196.

インターネット資料

一般社団法人英語4技能・探究学習推進協会.「高校の「総合的な探求の時間」とはどのような授業なのか？」<https://esibla.or.jp/info/inquiry-learning-contents/> (2019年9月20日アクセス) .

大分県教育委員会.「待ったなし！次年度から！いえいえ今から！！ 総合的な学習の時間の充実に向けて」(詳細版) <http://www.pref.oita.jp/uploaded/attachment/2041522.pdf> (2019年9月20日アクセス) .

埼玉県教育委員会.「国際理解教育実践事例：ゲストティーチャーによる国際理解教育（世界の12才は今）」<https://www.pref.saitama.lg.jp/f2214/kokusairikaijissenjirei.html> (2019年9月20日アクセス) .

文部科学省.「総合的な学習の時間の現状と課題，改善の方向性（検討素案）」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1399171.htm (2019年9月20日アクセス) .

